

—あおぞら—

新任常任理事あいさつ(3)

—大気環境学会の国際交流—

東京農工大学農学部
松田 和秀

新任常任理事のリレー執筆のバトンを受け取り、本号では、松田がご挨拶させていただきます。常任理事の担当として、早川和一先生の後を受け、国際交流委員長の重責を担うことになりました。2010年から6年間、Asian Journal of Atmospheric Environment (AJAE)の編集委員長を務めて参りましたが、こちらは奥田知明先生へバトンを渡し、私は日中韓学術交流の推進を中心とした国際交流全般の仕事へ取り組んで参ります。もちろん、AJAEは日中韓学術交流の要の活動ですので、今後は、国際交流委員長の立場から編集の現場を支援していきたいと思っております。

【日中韓学術交流】

話は前後しますが、本学会は、韓国大気環境学会(KOSAE, Korean Society for Atmospheric Environment)および中国環境科学学会大気分会(CSES, Chinese Society for Environmental Sciences)とそれぞれ学術交流覚書を取り交わしております。この覚書の写しは、本学会ホームページの「公開情報」欄に掲載されておりますので、一度、ご覧いただければ幸いです。なお、KOSAEとCSESの間でも同様な覚書が取り交わされており、これまでの日韓、日中それぞれの二国間交流から、日中韓の三カ国交流へと体制を移行しているところです。本年9月に神戸で開催された第58回大気環境学会年会では、上記の三学会から研究者が集い、「国際交流シンポジウム“日中韓大気環境学会交流の第一歩として”」を開催することができました。シンポジウムの後には、意見交換会(さらに懇親会)を催すことができ、今後につながる交流ができたのではと思っております。

これまで、私は、本学会からの依頼により、KOSAE年会(2014年、韓国平昌)およびCSES大気分会年会(2015年、中国広州; 2016年、中国上海)に参加してまいりました。これらの年会では国際セッション以外は現地語による研究発表がなされていますが、日本の大気環境学会と関心事は同様で、PM_{2.5}や光化学オキシダント等に関する多くの研究発表がなされています。また、研究アプローチに関して先進的な取り組みも見られ、これら三学会の交流が深まることは、学術的にもとても意義深いことだと実感しています。以上のような現状を踏まえ、当面の課題として三学会交流の確固たる基盤づくりを進めつつ、会員の皆様が本学会の活動を通して海外の研究者と交流しやすい環境を整えていきたいと思っております。

【国際交流の活性化】

私の国際経験は、1998年4月から2005年3月まで務めた酸性雨研究センター(現在のアジア大気汚染研究センター)での経験に端を発します。特に最初の数年間は、東アジア酸性雨モニタリングネットワーク(EANET)の設立に奔走し、研究とはかけ離れた国際環境行政の世界にどっぷり浸かっていました。学生時代、国際的な仕事にはあまり興味がなく、特別な準備をしていなかったもので、酸性雨研究センターでの仕事を始めてから慌てて“駅前留学”に通ったのを懐かしく思います。当時は、EANETの他に、韓国のNational Institute of Environmental Research (NIER)が主催する日中韓LTPプロジェクトや、国連開発計画、国連アジア太平洋経済社会委員会、JICAなどの仕事にも携わりました。また、これらの経験を活かして、いくつかの国際共同研究を自分で手掛けました。一つは、オーストリアのInternational Institute for Applied Systems Analysis (IIASA)との共同研究として実施したMICS-Asia Phase II、もう一つは、タイのPollution Control Department (PCD)との共同研究として実施したJoint Research on Dry Deposition Fluxです。いずれも軌道に乗せるまでに、国際共同研究ならではの交渉の難しさを経験しました。現在、前者は、Phase IIIとして若い研究者らが牽引しており、後者は、自分の研究室の研究テーマとして引き継がれています。

これらの活動を通して、多くの海外の研究者や行政の方々と一緒に仕事をしてきました。「多く」と述べましたが、実は、アジアで国際的な大気環境の仕事を動かしている研究者は、さほど多くはおらず、わりと狭い世界です。例えば、現在、日中韓交流の中国CSESの窓口であるMeng Fan氏や神戸年会で御講演いただいたMin Hu氏は、これまで、EANETや日中韓LTPプロジェクトなどにも関わってこれられました。また、韓国KOSAEの国際理事であるYoung Sunwoo氏と初めてお会いしたのは、上記した国連開発計画のRegional Projectのワークショップ(2000年、香港)だったと記憶しています。このように、比較的限られた人が、いくつかの国際プロジェクトに参加しているケースが多く見られます。日本も同様ですが、近年、このような活動の担い手は減ってきているように思います。今後、日本の次世代の研究者から、国際的な大気環境研究をリードする「プレーヤー」が一人でも多く現れるよう、本学会における国際交流のあり方について考えていきたいと思っております。